



廣瀬動物病院長

(富山市石坂新)

廣瀬 僚

今回は診察室での獣医師の思考回路をお話したいと思います。さまざまな症状の動物たちに最初から病名をずばり断定できるとよいのですが、なかなかそうはいきません。通常は飼い主さんの説明や問診、視診、触診などの情報を元に問題点を優先度の高い順に整理し「鑑別診断リスト」を考えます。鑑別診断リストとは、その問題が生じる可能性のある病気を列挙したリストです。発生頻度や可能性の高い病気、生命に関わる病気は必ずリストの上位に挙げる必要があります。その後さまざまな検査を行うことで「この病気は該当

獣医師の思考回路



超音波診断装置による病的な副腎の描出画像

しない」などと選別します。この過程を除外診断と言います。診察中の獣医師の頭の中はこのような思考で常にフル回転なのです。素早く問題点を見つけ、可能性のある病気を挙げ、優先順位を付けながら合理的な検査で病名を絞り、診断をして治療を開始する。この過程は獣医師の腕の見せどころです。

病名絞り込みに注力

先日、「飲水量と尿量が多い」と訴える雌犬が来院しました。われわれはこれを「多飲多尿」と呼びます。この場合、鑑別診断リストには腎臓病、肝臓病、胆のう疾患、子宮蓄膿症、糖尿病などが挙げられます。またストレス反応や運動量増加、暑い環境などでも多飲多尿が生じる可能性があり、ステロイド剤や甲状腺ホルモン剤、利尿剤などの投薬でも同様の症状が認められます。この雌犬は血液検査で血糖値の異常な上昇、尿検査で尿糖が認められたため糖尿病と診断し、インスリン療法を開始しました。犬や猫の糖尿病では多くの場合インスリン療法が第1選択となります。ただ、この雌犬では思ったような

血糖値の低下が認められませんでした。

この状況をインスリン抵抗性と呼びます。この場合、インスリン抵抗性を起こす原因や病気を探し、改善させなければ糖尿病の改善は期待できません。幾つかの追加検査の結果、この雌犬はクッシング症候群という副腎の内分泌疾患があり、その合併症として糖尿病を発症したと考えられました。

副腎の治療を開始したことでインスリン抵抗性が改善し、今は糖尿病もうまく管理ができています。病気の原因に別の病気が隠れている場合があり、獣医師は常にその点も念頭に置いて日々診察をしているのです。

毎月第1土曜掲載